

博物館研究ノート No.1

佐渡市博物館 研究ノート No.1

令和4年3月25日発行

発行 佐渡市博物館 佐渡市八幡 2041

発刊にあたって

平成16(2004)年に1市7町2村が合併して佐渡市となり、17年経過しました。

合併時、佐渡島内には相川郷土博物館、佐渡国小木民俗博物館、両津郷土博物館、佐渡植物園の4つの登録博物館(園)があり、さらに平成26(2014)年には財団法人の佐渡博物館が市に移管され、現在佐渡市内には5つの博物館と園が存在しています。

合併前、それぞれの館(園)では学芸員が中心となり特徴的な活動をしていました。ところが、当時の学芸員も定年などで退職し、新たな学芸員と交代したこともあって、かつての特徴的な活動を上手く引き継げないまま今日に至っています。

私も、30年前まで旧両津市郷土博物館の学芸員として勤務していました。当時の館長は自然科学に造詣が深く、自身が研究者であったこともあり、未熟な私に「書いてみることだ。書くことによって考えもまとまるし、新たな展望も開けてくる」「自分が成長するだけではいけない。みんなが成長することだ。後からくる者が成長することだ」などと叱咤激励してくださいました。

縁あって、今年度から博物館の手伝いをする事になり、学芸員の駆け出しの頃のことや、当時の館長の言葉を思い出しています。

同僚の若手学芸員も、知識欲に燃え活動を展開しようとしています。ところが懸命に頑張っても活動の発表の場、とくに調査・研究の発表の場がないことに気づきました。

そこで、まずは未完成のままでも「地域で知り得たことは地域にお返しする」ことを原則とし、知り得たことを皆さまに報告させていただき、ご意見、情報などをお寄せいただければと、研究ノートを発刊することにしました。いずれそれぞれがテーマを成熟させ、企画展や博物館報等として形あるものにできればと思っています。

博物館は、自分たちだけではあるいて行けません。地域の方々との信頼関係が構築されて、はじめてあるいて行けるものと思っています。

今後は、学芸員の顔が地域の方々に見えるように活動の輪を広げて行きたいと、一同肝に銘じております。

未熟な研究ノートではありますが、学芸員の心意気をおくみ取りいただき、活動へのご支援をたまわりたくお願いいたします。

(文責 池田哲夫)

栗野江 堂山遺跡出土の 古瀬戸灰釉瓶子について

相羽 理恵

はじめに

昭和 60 年、佐渡市栗野江（畑野地区）の林道から古瀬戸の瓶子が発見された。佐渡市の文化財に指定されている完形品で、14 世紀前半に瀬戸で生産された施釉陶器である。『畑野町史』や佐渡市ホームページ「佐渡の文化財」等で写真は知られているものの、実測図は紹介されたことがなく、今回実測する機会を得たので、再評価を試みようとするものである。

資料紹介

堂山遺跡（佐渡市栗野江 1853-1）は、畑野地区栗野江の集落から小佐渡山地の峠を越え、前浜の岩首港へ向かう古道（林道伊泰儀線）沿いにある。国中平野と小佐渡山地の縁辺部を走る広域農道から 700 m ほど登った沢沿いの傾斜地にあり、標高は 130 m をはかる。



国土地理院 1:25000 地形図

昭和 60 年の林道取り付け工事中に塚を断ち割った形で遺跡が発見され、完形品の瓶子や珠洲焼系の甕・片口の破片が出土した。当時の写真からは掘削断面に円礫が弧状に並んでいる様子が推測され、塚の表面に葺石が施されていた可能性が高い。

出土した瓶子の中には火葬骨が大量に詰まっており、この遺跡が葺石を伴い、蔵骨器を埋納した中世

の墳墓と推定された。

地元での聞き取り調査によると、他にも文字の彫られた墓石があったと言及されており、この一帯が墓地として機能した期間があったことをうかがわせる。現物は散逸したが、現在の墓石と比べ薄い方形を呈し、頂部が山形で、梵字のような文字があったということで（『畑野町史速報』第 59 号）、墓石の一部は古い形の板碑であった可能性をうかがわせる。

この瓶子は「古瀬戸灰釉牡丹唐草劃花剣先蓮弁印花三筋文梅瓶」という名で知られる（『畑野町史』）。淡緑色の灰釉が全体に施され（一部剥落）、肩部から胴下部にかけて 6 個の牡丹を配置し間を唐草文で埋め、底部付近には剣先蓮弁文がめぐる。三筋文は壺の上・中・下に三本の沈線文用を配するもので、この瓶子に三筋文がかすかに残ると『畑野町史』では言及されているが、実見では沈線文は残るもの三筋文を意識して残しているかどうかは確認できなかった。梅瓶は口のつくりが小さく口頸に段を持ち、胴から底部にかけてくびれずまっすぐ伸びる形で、祭祀用具のほか蔵骨器として利用される。

この瓶子の生産年代は、古瀬戸の中期様式、藤沢良祐氏による瓶子Ⅱb 類に分類され、14 世紀初頭～第 1 四半期に位置づけられる。市の文化財指定時には嘉元元 (1303) 年～嘉元 3 (1305) 年生産の実年代が与えられている。

同時代の遺跡は、泉畑田遺跡（金井地区）、三貫目沢遺跡（真野地区）、荒城遺跡（佐和田地区）などがあげられる。遺物が一定量出土するが、時期の特定が難しい掘立柱建物跡などのほかに明確な遺構はなく、当時の佐渡の様相は不明瞭な部分が多い。鎌倉時代を中心とした時期、12 世紀末頃から 14 世紀にかけて高いマウンドを持つ墳丘墓が発達し、一般的には地域の有力者の墓とみなされている。丘陵の頂部などに営まれた個人墓で、火葬骨を入れた蔵骨器を伴っている。新潟で発見される蔵骨器の多くは珠甕や壺で、真野地区の真輪寺跡でも蔵骨器と推定される珠洲焼が出土している（佐渡博物館所蔵）。甕を外容器とし、すり鉢をふたとして骨を納めていたと考えられる。

文献資料から見ると、佐渡一宮の地頭に対し、滞納している国衙領の年貢の納入を命ずる文書が鎌倉幕府から出されている（「正応4（1291）年8月5日付関東御教書」）。佐渡一宮は畑野地区宮浦字宮ノ腰にある一宮神社周辺と考えられており、佐渡国の守護・大仏氏、守護代・本間氏の本拠地のひとつ、守護所所在地が波多郷、畑野地区に比定されている。今回紹介した堂山遺跡の被葬者との関係をたどることはできないが、鎌倉文化に通ずる相当の有力者が

畑野周辺に存在していたことがうかがえる。

おわりに

中世の佐渡については、文献・考古資料などからたどれる部分があるが、在地の資料は十分とはいえず不明な部分が多い。神社仏閣や伝世品、島外の文献や流人の書き記したもののから得るものは多いが事例は少なく、発掘調査等で確認された中世の遺構・遺物も限られており、人々の生活の実態をたどることが難しい時代であるといえる。

今回実測した瓶子は、新潟でも出土することがまれな古瀬戸の優品であり、かなりの地位や経済力をもった有力者の被葬品ということが推測できるものである。人物の特定はできないものの、14世紀に佐渡で活動していた人々の姿が垣間見える貴重な資料であり、今後もこうした資料の実見・実測・紹介を重ねていくことで、佐渡の歴史の一端を明らかにする一助になれば幸いである。

参考文献

- ・新潟県立歴史博物館 2016『中世人の生活と信仰 越後・佐渡の神と仏』新潟県立歴史博物館
- ・畑野町史編さん委員会 1985「広報はたの 町史速報第59号」
- ・畑野町史編さん委員会 1985『畑野町史 信仰篇』三 中世の蔵骨器
- ・財団法人佐渡博物館 1993『図説 佐渡島 自然と歴史と文化』新潟交通株式会社
- ・藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院



古瀬戸灰釉瓶子

口 径：4.0cm

高 さ：26.5cm

底 径：10.5cm

生産地：愛知県尾張地方

生産年代：14世紀初頭から第1四半期

佐渡とクジラ ―本間義治の先行研究から―

平野 黎

はじめに

佐渡博物館では、令和4年度企画展として島における人びとの暮らしと関わりの深いクジラに焦点をあてた「佐渡とクジラ」（仮題）と題した展示を企画している。企画に先立ち、佐渡のクジラ研究を進めた本間義治^{*1}の研究を概観し、本展への手がかりとしたい。

佐渡近海のクジラ

本間義治は、平成2(1990)年から没する平成27(2015)年までの20年あまり、新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着記録について調査・研究を行っている。とくに漂着したクジラの種類、漂着場所、時期などについて分析し報告を行っている。

本間の調査によれば、佐渡における漂着記録で一番種類の多いクジラはオウギハクジラであり、その数は平成5(1993)年から平成24(2012)年の間で8頭を数えるという。

しかし、この傾向は佐渡というよりも新潟県全体の傾向であり、胎児等も漂着していることから、柏崎市沖がオウギハクジラの出産や育成に重要な海域である可能性を示唆している（本間2013）^{*2}。漂着の時期は冬から春にかけての記録が多く、原因として大時化などが考えられるという。

漂着以外にも、大型定置網に混獲されたクジラについての記録もあり、そのほとんどがミンククジラで、定置網が年間を通して設置されていることから、迷入したものとみている。

また、本間等は江戸時代以降の佐渡に残る史資料をもとに、クジラの漂着記録を見出している（本間1981）^{*3}。

おもに江戸時代の「佐渡年代記」や「佐渡風土記」「佐渡名勝志」などをもとに、寛永12(1635)年から昭和54(1979)年の間に46回のクジラに関する記載のあることをあげている。記載からは詳細なクジラ

の種類などの確認できないとしているが、漂着は3月から5月に集中しており、現在の漂着時期との大きな違いは見られないという。

佐渡汽船航路で目撃されるクジラ

本間は佐渡と本土を結ぶ佐渡汽船株式会社から、航行中に目撃されたクジラ類の記録の提供を受け、クジラの出現位置や出現時期、出現時間帯について20年近くに渡り情報収集・分析を行っている（本間2001）^{*4}。

佐渡汽船では、昭和52(1977)年のジェットfoil就航以降、幾度か大型海棲生物との接触事故を起こしている。そうした背景から、航路上にポイントを設け目撃記録を収集している。

本間の調査によれば、目撃地点は本土よりも佐渡寄りの地点で多く、目撃数は両津・新潟間と小木・直江津間で大きな差異はなかったものの、就航頻度を考慮した場合、小木・直江津間が最も目撃頻度が高かったとしている。

目撃時期は5月を中心に3月から7月にかけて目撃数が多く、時間帯は特に14時から15時に目撃数が高まる傾向にあった。

これらの調査の結果をもとに、佐渡汽船ではクジラの出現ポイントにおいて減速区間を設けたことにより、衝突事故も減少した（本間2013）^{*5}。

佐渡汽船から提供された目撃記録からはクジラの詳細な種類等は判明しなかったという。

佐渡の人々の中のクジラ

本間は佐渡周辺海域のクジラについて、佐渡に残るクジラ塚や魚霊塔、地名などの調査を進め、人々とクジラとの関わりについても研究している（本間1981、2005）^{*6}。

前述したように、佐渡では江戸時代の記録からも時折クジラが漂着していた。クジラという巨大な生物は「クジラ一頭、七浦を潤す」との言葉があるほどに、食用とされる肉だけでなく、油も採れ、他の部位についても様々な利用ができたため、多大な利益をもたらした。

そうした利益をもたらすクジラは漂着神(エビス)として崇められ、利活用後には感謝と追悼の思いを込め供養塔などが建てられている。本間の調査によると島内のクジラの供養塔は以下のようなものである(本間1992)*7。

- 1) クジラ下顎骨の卒塔婆(畑野松ヶ崎)
- 2) クジラ下顎骨の卒塔婆(両津片野尾)
- 3) 魚霊塔(両津羽二生)
- 4) クジラ墓(両津椎泊)

上記のものは全て漂着クジラに対して、供養のため建てられており、中でも片野尾では「海王妙慶信女」、椎泊では「釋震聲能度鯨魚」と戒名が付けられている。片野尾では当時の様子が解説板に掲げられるとともに(写真-1)、近くにはクジラの骨で作られた卒塔婆が今もそのままの形で残る(写真-2)。椎泊では戒名が彫りこまれた供養塔が、建てられた当時の場所から移設されたが、今でも残っている(写真-3、4)。地域の人びとがクジラに寄せた感謝と追悼の思いが感じられる事例である。

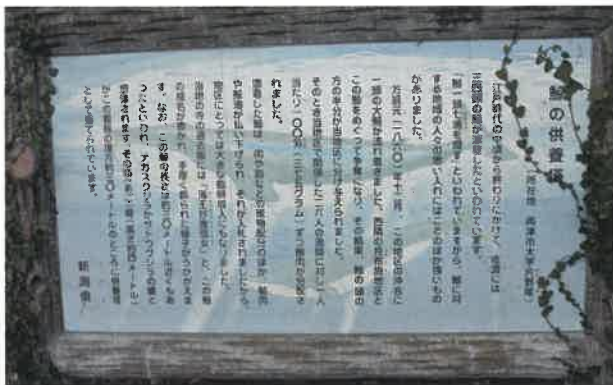


写真-1 クジラの漂着と卒塔婆(供養塔)について書かれた解説板(両津片野尾)



写真-2 クジラの下顎骨が卒塔婆(手前)として建てられている(両津片野尾)



写真-3 クジラの戒名が彫られた供養塔(両津椎泊)



写真-4 供養塔中央に掘られた戒名「釋震聲能度鯨魚」と確認できる。

また、島内にはクジラではないが魚や亀などの墓や塚もみられ、人々の海への感謝や信仰の深さが感じられる。

おわりに

本間の研究は、現代の佐渡海峡におけるクジラの生息環境や漂着記録など多岐にわたっている。また目撃記録をもとに、佐渡近海に生息するクジラの種類や生息時期についても明らかにしている。

さらに民俗分野に踏み込んだ本間の研究からは、佐渡島民が古くからクジラと接してきた信仰や生活との関わり、歴史の古さなどがうかがえる。

今回展示を企画するにあたり、本間の調査研究を手がかりに資料収集をすすめるとともに、さらに島

民とクジラとの関わりなどについて調査を進め、展示内容の充実に努めていきたい。情報等をご教示いただければ幸いである。

なお文中敬称は省略させていただいた。非礼をお詫びする。

参考文献

- ・ 本間義治 1981「寄鯨と鯨霊塔」『蒲原 (61)』
- ・ 本間義治・箕輪一博・青柳彰 1992「新潟県内における鯨の墓―追加と補訂」『日本海セトロロジー研究 (2)』
- ・ 本間義治・古川原芳明 2001「佐渡海峡における佐渡航路線(佐渡汽船)による鯨類目撃記録の解析(1994年4月～1999年10月)」『日本海セトロロジー研究 (11)』
- ・ 本間義治・三浦啓作 2005「佐渡の江戸時代文書に見られる大型海生動物の記録」『日本セトロロジー研究 (15)』
- ・ 本間 義治, 岩下 雅彦 2013「2012年中における佐渡海峡の新潟～両津航路船(佐渡汽船)による鯨類目撃記録」『日本セトロロジー研究 (23)』
- ・ 本間 義治・岩尾 一・箕輪 一博・中村 幸弘・青柳 彰・岩下 雅彦・大原 淳一・今村 美由紀 2013「新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着・混獲・目撃記録(2010年1月～2012年5月)」『日本セトロロジー研究 (23)』
- ・ 本間義治 2003『日本海のクジラたち』考古堂書店

*1 本間義治 (1930～2015)

日本セトロロジー研究会顧問、新潟大学名誉教授、新潟大学理学部附属臨海実験所長を歴任し、主に海洋生物について研究を行った。

*2 「新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着・混獲・目撃記録(2010年1月～2012年5月)」

*3 「寄鯨と鯨霊塔」

*4 「佐渡海峡における佐渡航路線(佐渡汽船)による鯨類目撃記録の解析(1994年4月～1999年10月)」

*5 「2012年中における佐渡海峡の新潟～両津航路船(佐渡汽船)による鯨類目撃記録」

*6 「寄鯨と鯨霊塔」、「佐渡の江戸時代文書に見られる大型海生動物の記録」

*7 「新潟県内における鯨の墓―追加と補訂」

令和2年度佐渡博物館特別展 「佐渡ゆかりの書」からみる佐渡の書

本間 裕徳

はじめに

佐渡は、江戸時代の金銀山開発によって、各地との交流が一層盛んになった。物資のみではなく人の流れも活発になり、各地から入ってきた人によってもたらされた文化は、佐渡の人々に大きな刺激を与えた。それは漁法や農法、能など技術的な伝達であったり、書や絵画などとして保管されているもの、石碑などのように通る人などの目に留まるような形で足跡を後世の人に残しているものなど多岐にわたる。

令和2年度の特別展では、佐渡にゆかりのある人物の書や書道具類などの展示を企画した。江戸時代から戦前・戦中を中心に、今日まで残った佐渡にゆかりのある作者の書や書道具類のもつ表現の豊かさ、日常の生活の中に「書」が身近にあることを、書を通して感じてもらうと同時にそれらの人物を知ってもらう機会にするための企画であった。

江戸時代から戦後の書

ここからは、特別展で行われた新潟大学教育学部教授岡村鉄琴氏による展示解説会「人とその書」を参考に述べてみたい。

もともと書は、自分の言葉などを書きとめておくことに始まった。よく「書画」といわれるが、一般に広く受け入れられたのは書であり、そこに書かれている内容が大事であった。

書画（書と画が一緒に書かれているもの）は、画材に山水を用いることが多く、字と画の占める割合によってどちらが主役かが変わる。画の空いたスペースに画の趣旨をメモ程度に書くもの（写真1）や、書の内容にあわせて画を書くもの（写真2）などがあり、「書」と「画」は切り離すことができないものであった。

江戸時代から戦前（昭和20年頃）までの書は、主に古事などからの借物の言葉（漢詩）が多く、他



写真1 本荘了寛「淡彩山水図自画賛」
相川郷土博物館 蔵
記念堂成垂廿年 淨財
也及幾千圓 由来我業非
吾力 慙愧鄙名世上傳
了寛詩書



写真2 永宮寺松堂「淡彩芭蕉図自画賛」
相川郷土博物館 蔵
芭蕉のわきして
盤に雨を しく夜かな
松堂南林書画

に自作の漢詩・漢文などもあった。江戸時代、佐渡の学問に多大な影響を与えた一人に亀田鵬斎（1752-1826）があげられる。鵬斎は江戸時代の著名な儒学者であり、「寛政異学の禁」*1により学塾を閉鎖、文化7（1810）年58歳の時に来島している。

佐渡では、江戸で鵬斎に師事した矢島主計が計画した講堂で講義をおこなったほか、田中葵園（1782-1845）の社中で論語の講義もおこなった。また、在島中には、沢根五十里・相川をはじめ、新穂・両津・河原田・真野新町・小木などに数泊して講義を行ったり、漢詩や碑文、額を書いたりした。現在でも蓮華峰寺（小比叡）には鵬斎が書いた碑や額が残る。他にも佐渡を詠んだ詩は12篇が知られるほか、碑文や館記が残っている。

写真3と写真4を比較して分るように、鵬斎の書は非常に特徴的な書であるといえる。写真3は比較的直線的であるのに対し、写真4はかなり線がくねっているのが分かる。

鵬斎の字体の変化は、良寛との交流が大きく影響しているといわれる。文化6（1809）年の「寛政異学の禁」以降約3年間、日光～信州～越後～佐渡を訪れている。「鵬斎は越後帰りで字がくねり」と擲

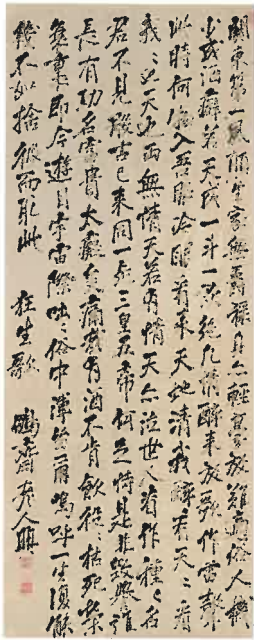


写真3 亀田鵬斎「狂生歌」
佐渡博物館蔵

ゆゆ
揄されたといわれていることから、この間に良寛
の影響を受けたと考えられる。ただ、良寛の影響と
いうより、良寛が学んだとされる懐素^{かいそ}*2 (725-785)
の影響が大きいと考えられる。

また、鵬斎の養子である亀田綾瀬（1778-1853）^{りょうらい}や主計の書を見ると、字まで鵬斎の影響を受けたと思われる。綾瀬は鵬斎をしのぐ儒学者とも言われ、鵬斎の後継者として佐渡島内でも大きな影響力を持ち、綾瀬に師事した圓山溟北（1818-1892）^{まるやまめいほく}によって、^{うかいいくじろう}鵜飼郁次郎（1855-1901）や坂口仁一郎（1859-1923）^{さかぐちにいちろう}



写真4 亀田鵬斎「无悶」 相川郷土博物館 蔵

などの政治家、岩木擴（1854-1933）や萩野由之（1860-1924）などの教育者が育った。いずれも溟北に漢文などを習っている。自作の漢詩や漢文が盛んに作られたのは、江戸時代ではなく明治時代とされている*3。

明治維新によって、さまざまな文化に対する価値観が大きく変わったとされるが、書は変わることなく続いた。書の形態は昭和 20 年頃を境に大きく変化を見せるようになる。

戦後になると漢詩を詠んだり作ることができる人が激減し、結果、自作の漢詩は作られなくなっていった。また、書の有り方・価値観が大きく変わり、江戸時代から戦前までは、漢詩など字数の多いものが主流で、戦後は字数が少数による表現が主流となってきた。それは「展覧会」などへの出展、戦前の机上での観賞から戦後の絵画などと同様に壁にかけての観賞へと変化したことで、文字の中に「見せ場」

【亀田鵬斎と交流図】

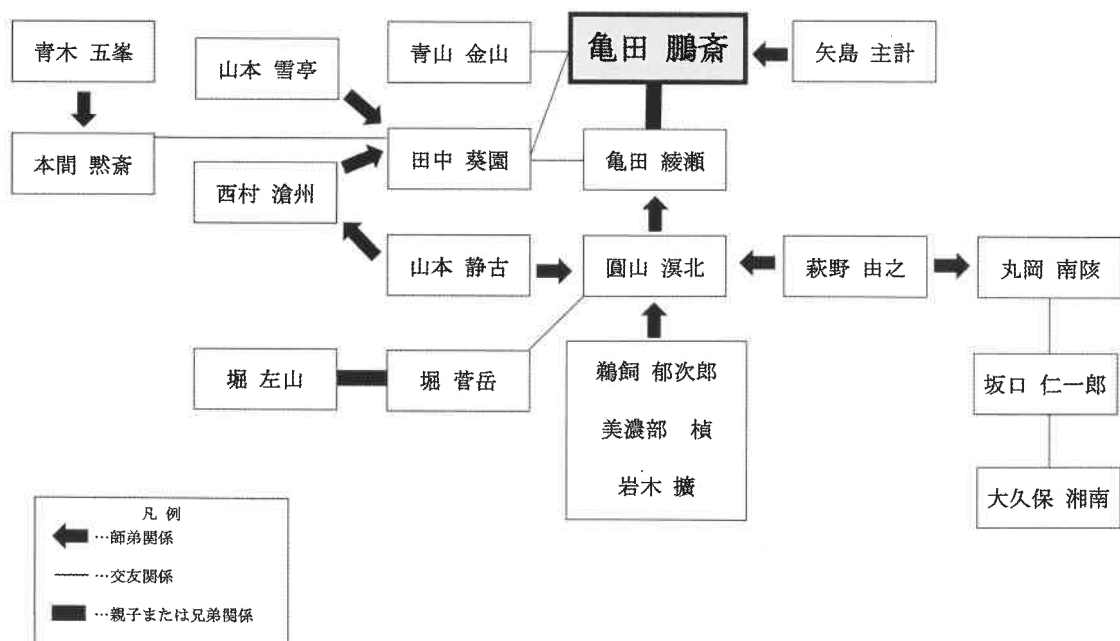




写真5 上田桑鳩「童心」 両津小学校 蔵

を作り、絵画的な要素が求められるようになったからである。例えば、当展で展示した作品の中では、^{うえだそうきゅう}上田桑鳩（1899-1968）の作品（写真5）などは従来の形からの脱却を進め、西洋の抽象絵画などの影響を受け、自由で抽象的な書を目指していた中での作品であろう。このような書き方は戦前では見られない書法であり、まさに戦後の書の典型とも言えるのではないだろうか。

桑鳩は、戦後の書道界において「前衛書」と呼ばれる分野を確立し、新たな流れを生んだ、いわゆる「書道界の大家」の1人である。佐渡とは無縁に思えるが、昭和24年7月24日～27日に来島し、書を残している。桑鳩が佐渡を訪れた折には、交流のあった^{なかむらぼくし}中村木子（1916-1973）が同行している。作品末の「己丑七月下浣」は昭和24年7月下旬にあたることから、桑鳩が来島した日程と一致する。この時木子33歳、木子の長男が8歳であったことから木子が桑鳩に依頼し、書いてもらったものを両津小学校に寄贈した可能性がある。

木子もまた、戦後の書を象徴づける作品を制作している（写真6）文字の始まりは絵であった。そこから徐々に形を変え、現在の形になったと思われる。その文字の始まりに近い「文字なのか絵なのか」と

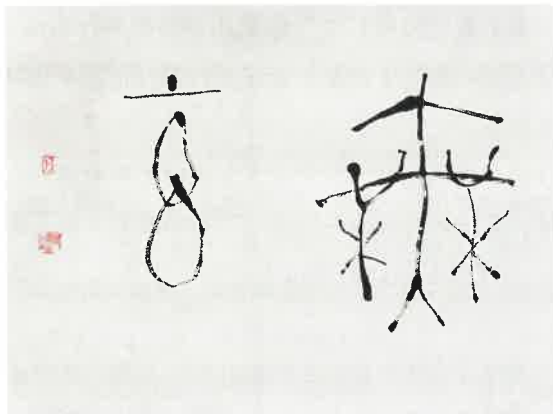


写真6 中村木子「無玄」 個人 蔵

いう時代のものを取り入れることで、それまでの書の概念を打ち破ろうと試みたものである。

横額（扁額）の書き方にも変化が見られ、横額は右から左へ書くものが通常であったが、戦後は左から右に書くことが増えてきた。古くから中国の漢詩の影響を受け、江戸時代から戦前に見られる書はおおむね右から左に書かれ、それは横額でもその法則が守られていたからである。戦後は欧米の影響も少なからず受け、左から右に書くことが増えてきたのであろう。

戦後の書の大きな特徴の変化は使用する墨色にも及んでいる。戦前、^{うすずみ}薄墨（^{たんぼく}淡墨）は甲意などに用いるものであり、忌み嫌われていたが、戦後、淡墨を用いた作品が、海外の人からの評価が高まり、広く用いられるようになった。その先駆けの1人が^{すずきすいけん}鈴木翠軒^{*4}（1889-1976）である。翠軒に師事し^{すいけんりゅう}「翠軒流」として、薄墨を駆使する作品を制作した書家によって薄墨が普及していった。

佐渡ではこの「翠軒流」を学んだ書家は^{ほんましゆせつ}本間守拙^{*5}（1916-2009）（写真7）と^{さいとうえいめい}齋藤瑛明（1897-1974）だけとも言われている。翠軒は戦前の国が定めた書道本の文字を書いた人物であり、「鈴木翠軒に逆らったら書道界では生きていけない」とまで言われたという。

その後、翠軒流の継承でない書家も薄墨を取り入れていくようになった。



写真7 本間守拙「藏輝」 佐和田中学校 蔵

展示作品群から

当展は全2回で展示を行ない、第1回では江戸時代から戦前・戦中に絞り、その中で活動した佐渡にゆかりのある人物、または書かれている内容が佐渡に関するものを選んだ。第2回では佐渡島内の小・中・高校に所蔵されている作品を、作者の出身や書かれた年代を問わず、各校から1点ずつ展示した。

第1回の作品は、江戸時代は亀田鵬斎を筆頭にいわゆる「学者」や、佐渡奉行、奉行所役人など、明治・大正になると政治家や学者などが多い。また、文化人も多く佐渡に来島し、残された作品も増えてくる。書かれているものは漢詩または俳句・短歌がほとんどである。漢詩ならば五言または七言絶句、俳句ならば定型句（5・7・5）など、漢詩にしても俳句にしても、古くから定められた形式の中での表現であるが、年代が新しくなると提携にこだわらない作品が増えてくる。季語や定型を排除した「自由律俳句」や自分や故人の言葉、少数作品などが台頭してくる。

「立場が人を育てる」といわれるように「書が立場を表す」といわれる。趣味で書いたものか頼まれて書いたものなのか。政治家や文学者などはきっちりとしたあまり癖のない書体で書いたものが多いなど、書からその人の立場を垣間見ることができるものも増えてくる。

第2回で展示した作品は、戦後の書が多くなる。市内の学校で所蔵されている作品は、作者が「教育に役立ててほしい」、創立記念や卒業生、また、その地域の出身であったりと「地域密着型」の場合が多い。そのため、年代としては戦後の作品が多くなり、形態もいつでも生徒や先生が見ることができるように額、特に横額が多い。

当展では文化人の書のほかに、江戸時代に佐渡金銀山の開発で盛んになった陶芸や鍍金作家の書作品や、書を書く上での必需品である硯や文鎮などの書道具も展示した。

書を書く人には、道具にこだわりを持つ人が多い。特に墨は高価なものと安価なものでは、まったく違

う色合いになることから、墨および硯にこだわる人は多い。

鍍金の書道具の傾向としては、受注生産が多く、大量生産ができたものは限られていたと思われる。鍍金は型を作り、1点1点仕上げをしながら作り上げなければならなかったからである。墨台^{ぼくだい}のように比較的造りが簡易なものは、1つ型を作れば、細工の仕上げが必要であったとしても、ある程度大量生産が可能であったかもしれない。しかし、矢立のように可動する部分があるものは大量生産が難しい。ただ、その分作る側の技量の高さを発揮できる場面でもあった。

また、陶器の書道具は、硯や筆洗などある程度造りが簡素なものに限られてくる。その中にあっても、細部や焼成などにこだわりを感じる。

展示した作品の中には陶芸・鍍金の道具のほか、陶芸・鍍金作家の画や書などもある。本職以外の部分であるが、高い技量を持っていたことが特徴としてあげられる。陶器・鍍金の作品を制作するうえで、絵付けや細工などで必要な技術であったことは間違いないが、画や書が多く残されているということは、陶器・鍍金の作品同様に、ある程度必要に応じて制作していたであろうと考えられる。

おわりに

令和2年度佐渡博物館特別展「佐渡ゆかりの書」では、111名、137点の作品を展示することができた。しかし、これは「作者1人につき作品1点」を基本線とした結果であり、佐渡に残された作品の氷山の一角にしか過ぎない。当展は次の2点を目的に進めた。

- ① 書を身近に感じてもらう。
- ② 人物の掘り下げよりもまず人物の存在を知ってもらう。

今回、作品をピックアップしていく中で感じたことは、もっと時代幅を限定し、その時どきの人物を取り上げてもいいのではないかとということであった。

佐渡は「文化の島」といわれているが、まだまだ掘り下げができていない部分が多い。世代が代わり、

後の世代になるにつれ、埋もれてしまう文化が増えてくる昨今、掘り下げる前に「掘り起こす」必要性をひしひしと感じている。特に書や絵画、美術・工芸などは、それらへの興味・関心の薄れが明白である。「おじいさんが集めていたけど、亡くなってから一度も開けてみたことがないからあるかわからない」などよく聞く言葉だが、過去の調査記録などから、さらなる資料の掘り起こしを進めてみたい。

佐渡金銀山を中心に世界遺産登録やジオパークの活用などが取り上げられているが、それらの上に文化が成り立ち、今日まで連綿と続いている。しかし、取り上げられる機会が少ない。掘り起こしによって得たものを博物館で公開し、多くの人が佐渡の文化について認識を深める機会を作っていきたいものである。

【参考文献等】

- ・本間周敬（著作者兼発行者）1915『佐渡人名辞書』全
- ・村島喜代子（著作兼発行者）1939『越佐人名辞書』／越佐人名辞書刊行会
- ・牧田利平 1972『越佐人物誌』上・中巻／株式会社野島出版
- ・牧田利平 1974『越佐人物誌』補遺編／株式会社野島出版
- ・山本修之助（編集兼発行者）1978『佐渡叢書』第十二巻／佐渡叢書刊行会
- ・加藤良作（著者兼編集者代表）1984『越佐工芸家名鑑』／新潟県美術商組合
- ・山本修之助 1991『佐渡の書』／新潟日報事業社出版部
- ・財団法人佐渡博物館 1993『図説 佐渡島 自然と歴

史と文化』／新潟交通株式会社

- ・1997『定本 佐渡の美術』／株式会社郷土出版
- ・相川町史編纂委員会 2002『佐渡相川郷土史事典』（『佐渡相川の歴史』別冊）／相川町
- ・藤川忠治著・藤川滋編 2002『歌集 兵われは 歌と評論叢書第8篇』／短歌新聞社
- ・荒木常能編 2002『越佐書画名鑑』第二版／新潟県美術商組合
- ・藤井青咲 2005『自註現代俳句シリーズ・11期 14 藤井青咲集』／社団法人俳人協会
- ・山本修己（編集兼発行者）2013『佐渡郷土文化』第一三二号 43～48頁「中川哲昌 倉田藤五郎先生書簡（圓山溟北の書解説）」／佐渡郷土文化の会

*1 1790（寛政2）年5月24日、寛政の改革の一環として江戸幕府が朱子学以外の学問の講義を禁止した学制改革。

つかだたいほう とよしまほうしゅう やまもとほくざん いちかわかくめい
冢田大峯・豊島豊洲・亀田鵬斎・山本北山・市川鶴鳴らは強く反対し、「異学の五鬼」と称された。

*2 中国唐代の書僧。草書の名家として知られ、『自叙帖』『草書千字文』『聖母帖』などが知られる。

*3 「佐渡ゆかりの書」特別企画展示解説会「人とその書」より。

*4 大正・昭和時代の書家。にわかいかく丹羽海鶴に師事。習字の教科書揮毫、書道教育に影響を与えた。

*5 日蓮宗法教山本光寺第32世住職。

佐渡ゆかりの書で展示した人物たち（抜粋）

下記は本文中ならびに【亀田鵬斎と交流図】に名前が挙がった人の略歴となる。

青木 金山	アキ キンザン	1780-1818	新穂生まれ。山本北山に師事。隅田川を愛し、没後に友人の亀田鵬斎や大窪詩仏らによって碑が建てられ、のちに隅田川神社に移された。
青木 五峯	アキゴ ホ	1781-1858	新穂生まれ。俳諧を志倉西馬に習い、その後若翁に師事し狂歌・俳諧をたしなんだ。また漢学を本間黙斎に学んだ。
岩木 擴	イキ ヒロシ	1854-1933	相川生まれ。圓山溟北に師事。小木小学校や佐渡高等科小学校で勤務、相川第二小学校校長などを歴任。『佐渡名勝』は尾崎紅葉の題字で、佐渡の案内書では最初のものである。
上田 桑鳩	ウエダ ソウキウ	1899-1968	兵庫生まれ。井原雲涯・比田井天来などに師事。「書道芸術社」を主宰し古典を追求。「奎星会」を結成、昭和30年以降前衛書道運動に奔走する。
鵜飼 郁次郎	ウカイ イクジロウ	1855-1901	真野生まれ。圓山溟北に師事し、漢籍を学んだ。第一回・第二回衆議院議員に選出され、両津－佐和田間県道、新潟－佐渡間の海底電線架設などに尽力した。
大久保 湘南	オクボ ショウナン	1866-1908	相川生まれ。18歳で内務省の官吏となる。漢詩壇の雄森槐南に師事。官吏退任後、槐南の助力を受け「隋鷗吟社」創設。
亀田 綾瀬	カメダ リョウライ	1778-1853	江戸生まれ。父 鵬斎に学問を学び、学塾・学経堂などを設けて子弟を教えた。
亀田 鵬斎	カメダ ボウサイ	1752-1826	江戸時代の儒学者。江戸で門人だった矢島主計の招きで文化7年(1810)58歳の時来島。主計の講堂のほか、田中葵園の社中でも論語の講義をおこなった。また、佐渡を詠んだ詩は12篇が知られるほか、碑文や館記が残っている。
坂口仁一郎	サカグチ ニイチロウ	1859-1923	阿賀浦村生まれ。森春濤に師事し詩文を学ぶ。1902(明治35)年に衆議院議員当選。勲四等、従五位勲三等受章。新潟米穀取引所理事、憲政会新潟支部長、新潟新聞社社長を勤めた。
田中 葵園	タナカ キエン	1782-1845	相川生まれ。西川恒山に入門し、徂徠学を学ぶ。江戸で林衡述斎、佐藤一斎に師事。亀田鵬斎・綾瀬父子・太田南畝らと交流をもつ。また、奉行所内に学問所「修教館」を開設。丸山遜卿・本間黙斎を教授に迎え、医学所・武術所なども付設、地役人の教育機関とした。
中村 木子	ナカムラ キコ	1916-1973	両津生まれ。蒲鉾製造業を継ぐ。青年期の雅号は香山。原田翠屋、米倉大鎌に師事。旧来の師承、会派と離別して墨人会を結成し、書における個性と革新を提唱した。
西村 滄州	ニシムラ ソウシュウ	1821-1895	相川生まれ。田中葵園に師事。また修教館に研修し、詩をよくした。佐渡奉行所地方頭取。佐渡県・相川県では、中属、権大属、一等警部、三級判事補など歴任。廃藩置県となると退職、その後は島内各地で塾を開き、育英に尽くした。
萩野 由之	ハギノ ヨシユキ	1860-1924	相川生まれ。丸岡南陔・圓山溟北・重野成斉安繹に師事。東京帝国大学教授、帝国学士院会員など多くの職を歴任。『佐渡地誌』『佐渡人物志』等多くの著書も残すなど、歴史学者、文学博士として活動した。
堀 管岳	ホリ カンガク	不詳 -1844	金井生まれ。堀左山は実兄。兄左山に教を受け、弱冠成島司直の門に入り経史を攻究。学和漢をかね、詩は特に左山をしのぐといわれた。圓山溟北と交流があり、『論語正就録』など詩文稿が残る。
堀 左山	ホリ サザン	1799-1843	幼時より丸山遜卿に学び、江戸に出て成島司直・佐藤一斎に師事。多くの書物を集め、耕作監督の傍ら手から書を放さなかった。著書に『論語方鳩録』『左山詩文稿』(三卷)『発句集』がある。
本間 守拙	ホンマ シュセツ	1916-2009	真野生まれ。鈴木翠軒に師事。世尊寺三十二世住職。この間、島内小中学校の教職を勤める。書作活動も個展を開催するなど意欲的である。
本間 黙斎	ホンマ モクサイ	1755-1829	相川生まれ。京都で那波魯堂に漢籍を学ぶ。奉行所内に修教館が開設されると、教授に推挙され、辞した後新穂に私塾「犁雨邨舎」を創設し、教育につとめた。
丸岡 南陔	マルオカ ナンガイ	1823-1886	相川生まれ。昌平黌で学んだ藤木実斎、漢学者田口江村に学んだ。慶応3年(1867)修教館教授となり、維新後は学区取締兼教師となり、相川小学校の設立に努めた。
圓山 溟北	マルヤマ メイホク	1818-1892	両津生まれ。亀田鵬斎の養子綾瀬に師事。学古塾を再興する一方医業に従事。38歳の時学問所の儒家となり、相川で学古塾を開き佐渡の多くの子弟を育てた。
美濃部 楨	ミノベ テイ	1843-1921	相川生まれ。修教館に入り、のちに圓山溟北に漢籍を学んだ。1875(明治8)度津神社の宮司となった。羽茂に塾を開き、多くの人が学んだ。
矢島 主計	ヤジマ カズエ	1775-1832	佐和田生まれ。亀田鵬斎に師事、漢詩・書画・和歌・俳諧・茶湯などもよくす。鵬斎を招き「励風館」で経史の講義をおこなったほか、「励風館」の事業として、亀田鵬斎著『旧註蒙求』上中下三冊と、『善身堂家言』を出版している。
山本 静古	ヤマモト セイコ	1865-1937	真野生まれ。西村滄洲・圓山溟北に師事。書は中国の法帖から、画は酒井珠津に学んだ。『佐渡国誌』『真野村誌』編纂に尽力。『静古楼詩集』『懷旧集』『佐渡先哲碑文集』を残す。
山本 雪亭	ヤマモト セツテイ	1807-1884	真野生まれ。田中葵園に漢学を学ぶ。また、囲碁を好み、江戸の井上因碩の門に入り二段の免許を受けた。著書に『雪亭小稿』『老圃私言』などがある。

【資料紹介】 昭和8年新潟県穀物検査所 における風俗慣行調査について (1)

— 二宮村分 —

相羽理恵・池田哲夫

はじめに

新潟県穀物検査所は、米穀等の検査を目的に大正8(1919)年新潟県により設置されたものである。大正15(1926)年9月知事部局発行の職員名簿『新潟県知事部局』によれば、「新潟県穀物検査所」は県内7か所にあつて*1、佐渡には「両津穀物検査支所」(所在地両津町夷)が設置されていたようである。

ここで、昭和8(1933)年に「風俗慣行調査」を行っている。残念ながら、現存する資料には調査の目的、調査方法、調査の区域割りなどの記述はないが、調査は当時の市町村単位で行われたものと思われ、以下の報告が現存している。

二宮村分・金泉村分 小木町

二見村 第2区 生産検査委員会 佐々木佐一
第5区 松ヶ崎村勤務 猪俣生 [(こめ
雑記原稿)]

外海府村 川口周作 [(名勝地調査の件)]

吉井村 吉井村電気事業に就て

赤泊村 昭和8年3月 風俗慣行調査 赤泊村

岩首村 岩首村慣行調査

沢根町 伊藤与作

松ヶ崎村 昭和8年1月 第5区松ヶ崎村勤務短期
生産検査員 松ヶ崎村風俗慣行調査

吉井村 昭和8年3月16日 佐渡郡第壱区吉
井村生産検査員 佐藤三四吉

第1区生産検査員 本間弘

この当時、文部省主導の郷土教育が盛んであり、佐渡でも学校と関わりながら郷土史家等による年中行事や風俗慣習などの調査が行われている〔池田2006〕。

ところで、穀物検査所でこうした調査が行われていた実態はほとんど知られていない。特段、調査項

目等の示された様子も見当たらず、日付と簡単な説明が付されたものがほとんどであるが、なかには詳細に記述されたものもあって、年中行事などの資料として貴重なものもある。

折しも当館では、1月から3月まで「佐渡の年中行事 -島の小さな祈りの形-」と題した企画展が開催されたが、その資料集としても有意義なものと考え報告を試みた。

「風俗慣行調査」は、上記のように広範囲の地域で行われている。本稿ではまず「二宮村分」をとりあげ紹介してみたい。

本文は縦24.7cm横16.7cmの薄紙に14本の赤の罫線、新潟県穀物検査所と赤字で印刷された罫紙に記載されている。

この報告書は旧両津図書館に保管されていたもので、図書館の移転にともない平成29(2017)年に佐渡博物館に移管され、未整理のまま保管されていたものである。

掲載にあたって、カタカナで書かれている民俗語彙と思われる部分はそのままにし、それ以外はひらがなに、漢字も常用漢字に改めた。縦書きであったものを横書きに改め、漢数字は算用数字に置き換えた。本文中には、現在から見ると不適切な用語があるが、資料的価値を尊重するため、原本表記にしたがった。

佐渡郡二宮村

年中行事

正月

俗に中暦と称し一月遅れにて行う。1日から4日まで家業を休む。

元旦

神棚に松、榊を供え、メ飾りをなし燈明を点し、神酒、鏡餅を供え氏神様に参拝す。居間に松飾りをなし、「めだまの木」として樹木の枝に餅を径2、3分位に切りたるものを無数に刺したるものを飾る。なお「ゆずり葉」も飾る。「めだまの木」とは五穀を意味したるものにて五穀豊穰を祈るものなり。「ゆずり葉」は代々家督を継ぎ家門繁栄を

願う意味なり。

仕事始

2日早朝より各自の生業を行う。但し作業は朝食前迄にして朝食後は休む。

うたい 謡 初め

2日夜謡曲の師の家に赴き年始の礼をかね謡曲を謡う。多く高砂、鶴亀等目出度いもののみ。このとき酒肴及び餅等を饗応す。来客は手拭い、タオル等簡単な手土産を持参す。

七草粥

7日朝七種の野菜(豆腐、こんにゃく、芹、人参、牛蒡、大根、青菜)を混じて炊く。主婦は前夜「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に七草生えて」と繰り返しつつ前述の野菜を刻む。

田守始め

11日。松飾りを取り除きその年の「金神明きの方」の立木に納む(如何なる様式にて納むるや)。この松飾りは田植え始めの際赤飯を焚く際に用ふ。

(時間如何)

神棚に供えし餅を焼き、酒肴、松飾りの松及び鉾を持ち自家の耕作する田地の水掛け口に到り松(形如何)を立て、神酒、餅を供えて柏手を打ち拝し、次に3献呑み終わり、鉾を3度振り上げ耕す形をなし(大きさ様式)、柏手を打ちて終わる。農家の豊作を祈り耕地を愛し農の尊き意義深き行事なり。

節分

3日または4日。「福は内鬼は外」と唱えて豆を撒くこと普通にして異なることなし。

(撒く時間 撒く場所の順次)

この際に用うる豆は黒豆を用い「豆の木」にて炒る。尚当地方にては節分の豆撒きが遅れると1年中の農事の仕事が遅れるとて競うて早く撒く習慣なり。

祈祷念仏 (または祈祷真言)

組の内または講中と称するもの。交互に各自の家に至り一同居間に車座に居並び、球の大きさ直径

1寸、長さ2丈〜3丈もある大数珠を繰りつつ念仏を唱え、一家の年中無事息災を祈る。

その後、酒、肴及び餅「そば」「うどん」等を饗応す。4日又は5日より始め、1日大凡3、4軒を回る。講中の内、忌中及び類忌中のものは遠慮して出席せず。

『とうろや』

15日の夕刻一定の場所に松飾り及び竹の葉の付いたままのものに短冊、色紙等数多結び藁、松飾りの松を持ち寄り、女、子供等数多集合し「とうろやとうろや」と囃しつつ、火を放ち燃やす。子供は習字の清書を持ち来たり火に入れ、炤の高く舞い上がるを見て喜ぶ。近年警火上の注意書きにより、昔より規模小となりたるも尚その涕を残しつつあり。

日待

14日の晩氏神の社殿に参集し、雑談をなし徹□をなす。神社より酒、握り飯を出す。

近年この機会を利用し、青年会などが主催となり、産業、風俗その他に関する講演会を開催す。

天神祭

24日夕刻、家の床の間に菅公の掛図を掛け、梅枝、天神笹(当地方にとくに天神笹と称する葉の小なる笹あり)を供す。25日は赤飯を供え天神社に参詣し子供は習字の清書等を奉納す。

天道念仏

3月1日村の観音堂等を集まり、日の出より日没まで交代にて休まず鐘を叩き念仏を唱う。一名「鐘切らず念仏」ともいう。

釈迦涅槃会

3月15日各自の家にて色つきの団子等作り仏壇に供えお寺参りをする。

春彼岸

彼岸入りの日墓参をなす。仏壇には朝夕燈火を点し、団子、香花を供え、親族互いに仏詣りに往来す。又近隣に餅、団子等を配り物をなす。

社日

朝(秋の社日は夕刻)牡丹餅を作り、社日様に供え、社日詣りに赴きその年の豊作を祈る。

桃節句

一月遅れて4月3日に行う。鄙人形を飾り、餅を食し仕事を休む。

山の神の祭

3月9日、この日には絶対山に入らざる習慣なり。

降誕会

5月8日、仏寺に参詣す。

菖蒲の節句

6月5日、軒に菖蒲、ヨモギを挿し、菖蒲湯を浴し、柏餅、ちまきを作り、又鯉幟を樹つ。家業を休む。

田植え

「田植え初め」として始めて田植えをなす日。

土用の丑の日

未明に起きて薬草(どくだみ、げんのしょうこ)を採取し餅を食す。海水浴をなす。

この日虫供養とて村の老婆、老人、うち連れ鐘太鼓をならし念仏を唱えつつ田地を回る。

盂蘭盆

6日朝墓の掃除をなす。13日夕刻香花を携え墓参をなす。墓石に蓮の葉を冠らす。墓前13日より16日まで灯籠を建て燈明を献ず。座敷の床の間に壇飾りをなし種々の野菜、果物、団子等を供し親族互いに盆詣りと称し仏前に詣る。その際茶菓、食事を饗応す。

盆踊

鎮守、寺院等境内に主として青年等集合し「おけさ踊り」「音頭踊り」「さし踊り」等踊る。

「盆の16日踊らぬ奴は 木仏、金仏、石仏」

「盆だ盆だよ盆なりゃこそ踊れ 秋の8月誰踊る」

「揃うた揃うたよ踊り子が揃うた稲の出穂よりよく揃うた」

裏盆

18、9日頃と22、3日頃裏盆と称し休業す。

八朔

1日 9月1日半日休業す

十五夜

陰暦8月十五夜、縁側に枝豆、尾花、餅などを供え、月を祭り餅を食す。

刈り上げ祝い

稲の刈り上げを終わり、農事大体片づきたる頃、都合良き日を選び近隣の子供、秋の手伝いに来る者など招き餅、赤飯等作り、夕食をご馳走す。

又近隣にその夜のご馳走を配る。

重陽の節句

餅を食し、他家に嫁いだ兄弟姉妹を招待し馳走をなし家業を休む。

社日彼岸

春と同じ

洗濯餅

他に嫁いだ嫁は「洗濯泊」と称し、1年に春、夏、冬の3回10日間くらい実家に赴き帰るとき洗濯餅とて婚家の近隣に配る。

太子講

12月23日餅をつき、他家に嫁いだ姉妹を招待す。翌日朝食には「太子の足洗い粥」とて粥を炊き、なお「太子の足跡蔭し」とて翌24日は必ず大雪なりと言い伝う。

煤払い、餅つき

共に家毎に昔より定まれる日あり、その日に行う。煤払いは多く19日、20日、23日。餅つきは多く26日、28日等に行い29日には「九日餅」とて、餅つきも忌む。

(2) 婚礼に関する習慣

当地方にては上流、中流、下流の区別さほど甚だしからず。今は男子23、4歳位まで女子21、2歳より24、5歳までに結婚する最も多し。

季節は12月、1月最も多く、次に11月、3月に多し。

8月(盆月)、4月(花見月)には婚礼を行うこと

は忌む。なお女子の19歳、男子の25歳には厄年として結婚を忌む。

結納

結婚の予約をなす際(即ち縁談の成立せるとき)、吉日を選び「酒する」とて媒酌人、新郎の父、清酒一樽及び魚を持参し新婦宅に赴き婚礼予約の酒宴なし婚礼の日取りの打ち合わせをなす。婚礼の日は「申」「午」「丑」「仏滅」「先負け」等の日は忌み「子」「巳」「酉」「大安」等の日を好む。

婚姻式

招待客 親戚及び講中と称する者

持参祝儀品 親族は酒1樽及び新婦に小袖綿1包等。講中へは御錫代とて金一封持参す。

当日「迎え女房」と称する者と媒酌人新婦方に迎えに行く(午前10時頃)。

婚礼の行列婚家に近づく際婚家の親族は礼服にて門口まで出迎う。

到着すればそれぞれの挨拶を交わし、簡単な食事の後、結び盃の式を行う。行列到着の頃より見

物人群集し縁側の障子を破り見る(図-1)。

結び盃の式の際は親族等「高砂」等のめでたき謡曲を謡う。また「福は内 福は内」と唱えつつ豆を撒く。次に祝宴を催し、終われば披露宴になる(午後8時頃)披露宴の終わるは12時頃なり。

長寿祝い

上流の者のみ長寿祝いをなす。還暦祝いのことを当地方にては「ふぬけ帰り祝い」、米寿祝いのことを「八十八祝福」と称し、いずれも近親者、講中の者を集めて酒宴を催し、また記念として神社、寺院等に物品の寄付をなす者もあり。

葬式

死者のありたる場合はすぐに神棚を閉じ、死人の枕元に屏風を逆さに立つ。それより寺院、親族に「告げ」を出し、家の軒端に「立願ほどき」とて竹の先に扇の要を破りたるものを掲げ、門口には「不幸」札を建つ(図-2)。

死を知りたる時は村内一般悔やみを述べに来る。

講中の者2人宛手伝い集まる。湯灌を行う際、講中の者湯灌念仏とて鉦を叩きつつ念仏を唱う(日蓮宗は別)。

次に棺を座敷の中央に置き、通夜を行う。この際近親者、縁故者等集まり、念仏を唱う。

夜食に酒肴を供す。

読経は宗旨により異なるも大凡6人ないし10人にて行う。

読経終わりて近親の順に焼香をなし、火葬場に送る(図-3)。

骨拾いは近親者にて行い、骨を拾う際は特に木と竹の箸を1本宛持ち拾う。平素竹と木の箸を混じ使うことを忌む。この為なり。

命日より数えてそれぞれ一七日(初七日)、二七日、三、四、五(三十五日)、六、七(終七日)を行う(図-4)。



図-2

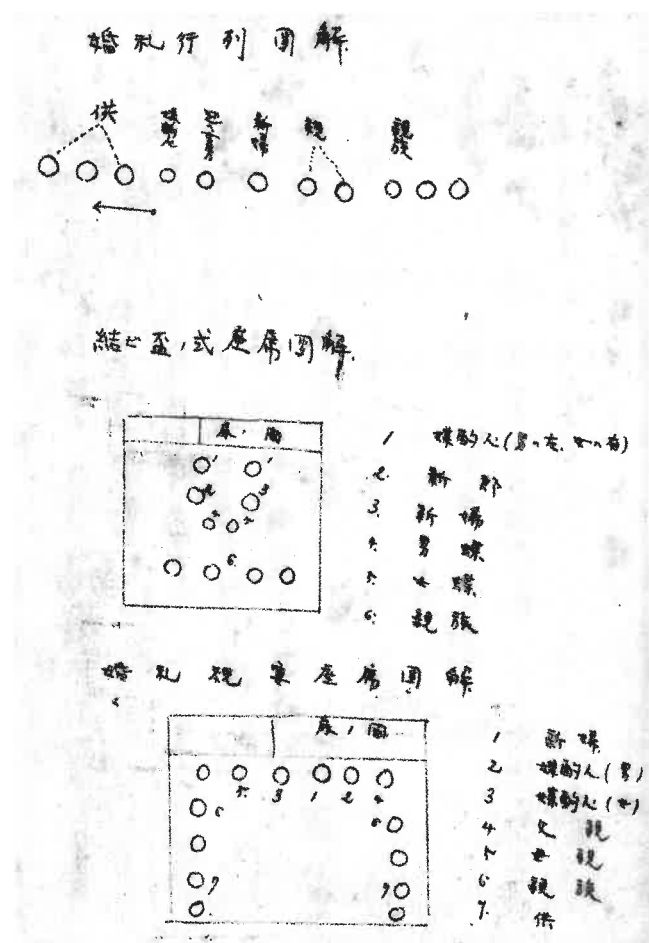


図-1 婚礼行列と座順など

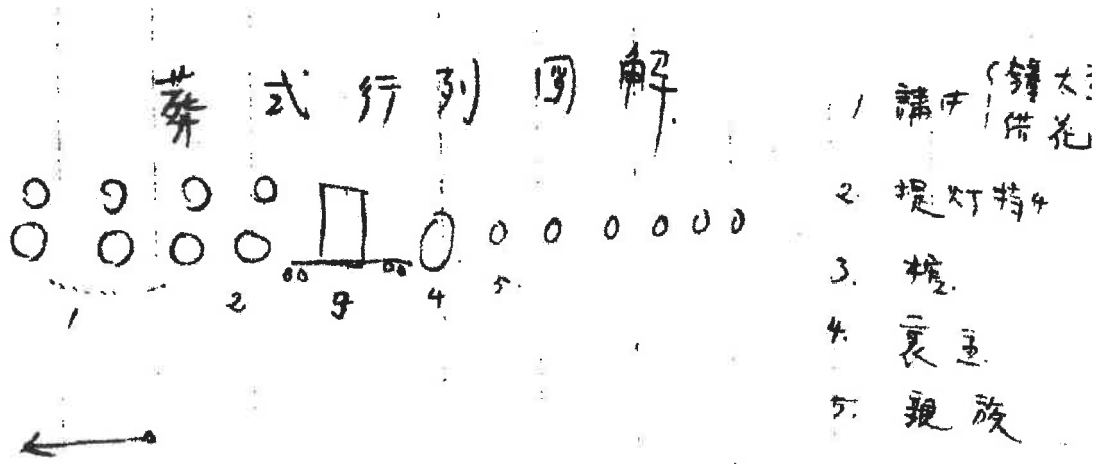


図-3 葬式の行列図

七日には親族、会葬者、講中の者集まり(午後8時頃)念仏を唱え、終われば酒肴を饗応す。

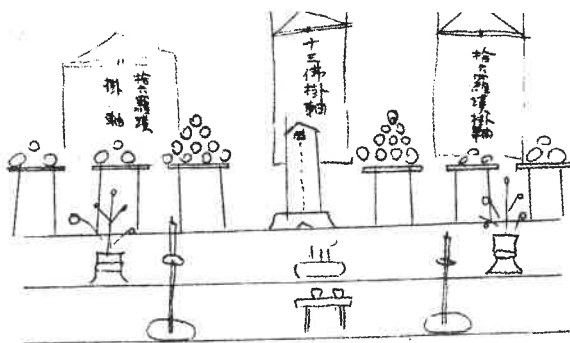
一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌何れも命日の前日より親族集まり、僧侶を招じ読経をなし、個人の追善供養をなし終わって墓参、寺参りをなす。

招待を受けし者は仏供米(白米2升)及び野菜を持参す。

会葬者の服装

男子は紋付、羽織、袴、女子は紋付きを着し額に「色手拭い」として巾3寸位の黒の鉢巻きを巻き、「色帽子」として白羽二重または白綸子の2尺4方のものを冠る。

水死せる者及びお産のために死せる者のためには、とくに「流れ勧請」(図-5)なる供養をなし、川の傍らに図のごとく赤木綿を張り、赤木綿の色あせて始めて成仏するといひ伝え、近親者、縁故者は水を注ぎ故人の冥福を祈る。



葬壇図解

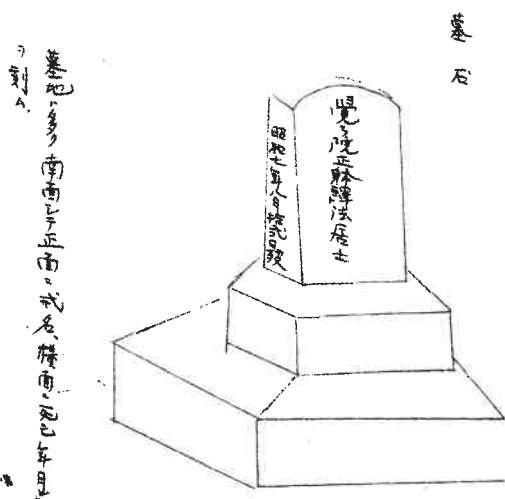


図-4 葬壇と墓石

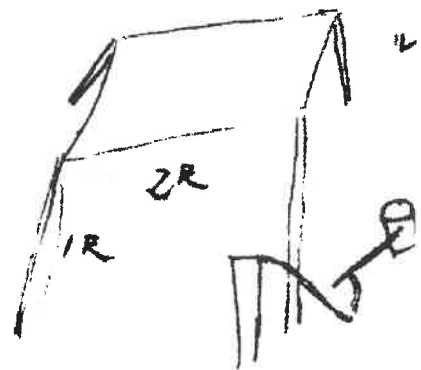


図-5 流れ勧請

縁起話

(1) 乙和池由来

二宮村大字青野地内人家を去る1里の地点に乙和池とて周囲2丁ばかり池の中に浮島あり。風の吹くままに池中を漂ひ人の7、8人位乗るも沈まず。今を去る600余年前二宮村大字中原談義所に乙和と称する下女奉公し居たり。春の1日摘み草に山に登り、小なる水溜まりにて着物の裾を洗いたるに、其処に住み居たる龍神に見込まれ生涯の契りを約す。龍神は美男子に化し談義所に乙和を迎えに来る。乙羽は龍神なりしことを知り恐れたるも、約束なれば仕方なく龍神に連れられ山に登りたりと。その途中悲しさのあまり念仏を唱え仏を念じ路傍の石を叩きたるに、鐘の音発したる。この石は今も「鐘叩き石」とて大字青野地内にあり。

毎年6月23日は乙和の命日(あるいは山へ連れられし日か?)とて談義所の住持ににより盛大の供養を営まれ、また乙和池に参詣(池の端に一堂あり)するもの多く、夏季旱天うち続き灌漑水欠乏し困却するとき談義所の住職乙和池に登り雨乞いするとき必ず降雨ありと言い伝ふ。

恋に浮島 浮名はたてど 水に沈んだ乙和池(俚謡)

(2) 袖ヶ沢

二宮村大字一ノ沢地内にある地名。日蓮上人この地(今の妙照寺)に謫居せる頃、お衣の袖を裂き法華經を書きたるところなりと。なおこの地にある小川にある貝に異なる白の斑点あり。日蓮上人この川

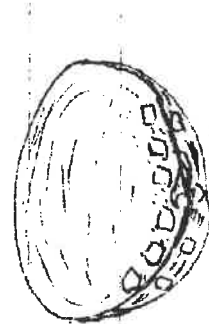


図-6 鳥貝

にて貝を拾い後世世人のため医薬の補いとなれとて經を読み南無妙法蓮華經の7字を書きて流したりと。鳥貝とて淡水に産する貝なれどこの池の貝に限り特異の斑点をもつなり(図-6)。

名物

二宮村大字真光寺を本場とする「真光寺ダラリ柿」あり。果実肥大にして乾柿に適し味も良好なり。昔より「七つ剥いたら夜が明けた」の譬あり。現在の産額はあまり多からず。生果1個1錢5厘位にて取引さる。産額千円位なり。

方言

家族同士の呼称

	上流	中流及び下流	
父	とっあん	ちゃん、とやん、とう	中流と下流の区別は大差なし 他人より呼ぶ際にはやや敬意を表し、中流には上流、下流には中流の呼称を用ふ
母	かかさん かかやん	うめえ かやん	
祖父	おぢさん おぢやん	ちゃん	
祖母	はばさん はばやん	ばあ ばあばあ	
姉	あねさん ねえさん	あんにゃん	
兄	にいさん あにさん	あんちゃん	
曾祖父	大きいおぢさん 大きいおぢやん	大きいちゃん	
伯叔父	おぢさん	おっさん	
伯叔母	おばさん	おばあ あばやん	
乳子	あかんぼう あかちゃん	あか	

事物の呼称

浪(のた)
粥(けえ)
牛(ぼう)
東風(あい)
西南風(くだり)
北東風(やませ)
沢山ある(いかいある)
官吏(だなさん)
魚(ぜぜ)
餅(あぼ)
来い(こいっちゃ)
すべて動詞の命令体に「ちゃ」をつける
できない(らちゃかん)
精励する(ふんばる)
物(もん)
着物(きもん)
編み物(あみもん)
月(とうとうさん)
「ダ・ド・デ」を「ラ・ロ・レ」を発音する物多し
麺類(ぞぞ)
霰(あらね)
座る(ねまる)
胡座(あぐち)
稲(いねさん)
水(ぶんぶ)
煙草(たばこ)
豆腐(とうち)
葬式(そうれん)
蟻(ありんじょ)
大工(ばんじょう)

旧跡

御松山実相寺 二宮村大字一ノ沢 日蓮上人一の谷妙法寺に謫居中毎朝朝日を拝せし所なりと境内に「お手水清水」あり、上人のお手水を使われし清水にて、眼病の者この清水にて洗眼すれば靈驗ありという。また境内に袈裟架けの松あり。県道を距てること3丁、山門まで自動車道路あり。

一の谷妙照寺 二宮村大字一ノ沢にあり。鍛冶町より右折し登ること10丁一の門に達す。日蓮上人3ヶ年謫居し給い本法開頭の靈跡にして境内幽閑、老松繁茂し、宝蔵、七名鏡堂、祖師堂、仁王門、本堂何れも広壯にして、日蓮宗無二の靈跡にして参拝者四季絶えず。

その他主なる寺院

本田寺(曹洞宗)
妙経寺(日蓮宗)
長福寺(真言宗)
玉泉寺(曹洞宗)
常信寺(日蓮宗)
福衆院(曹洞宗)
正覚坊(大谷派)
田中坊(真言宗)
大慈院(曹洞宗)
西光寺(大谷派)
円満坊(大谷派)
蓮華院(真言宗)

神社の祭典

郷社二宮神社 順徳天皇第二皇女忠子女王を祭る境内に忠子女王の御墓あり。拝殿を菖蒲殿と称し例祭を6月5日に挙行す。余興として青年連に依り鬼太鼓獅子舞が行われ、また神馬の行事あり。

その他おもなる神社(祭日)

金北山神社(4月7日)
村上神社(4月7日)
八幡若宮神社(4月3日)
中原神社(6月8日)
羽黒神社(4月8日)
白山神社(4月8日)
高浜神社(4月8日)
諏訪神社(6月8日)

建築物

農家の構造多くは木造、葺屋根なるも近来瓦屋根次第に多くなりたる(図-7)。

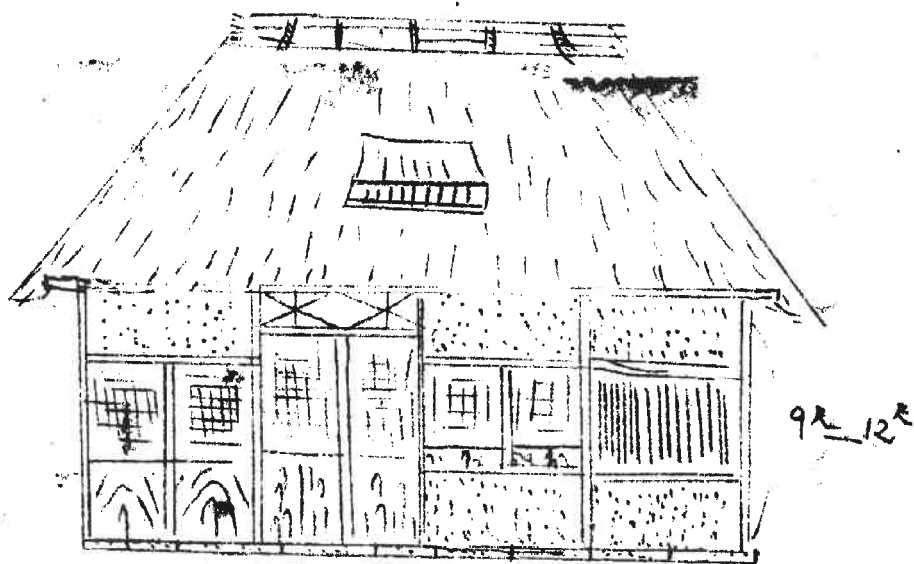
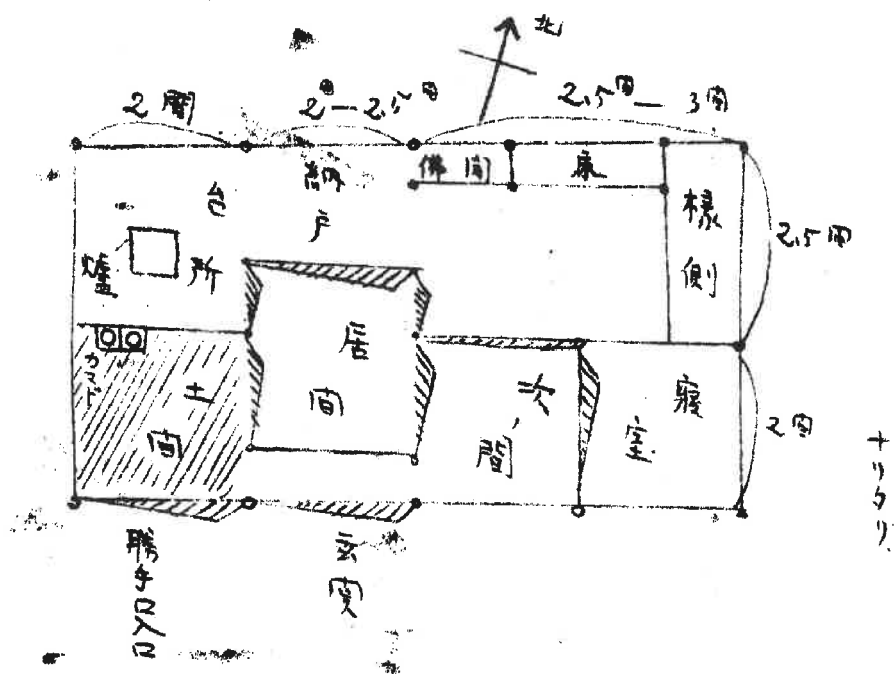


図-7 農家の図

[参考文献]

池田哲夫 2006『佐渡島の民俗』高志書院

中山徳太郎ほか、1938『佐渡年中行事』民間伝承の会

*1 大正 8(1919) 年に新潟県穀物検査所が設置され、昭和 13(1938) 年新潟県農産物検査所となり、昭和 22(1947) 年新潟食糧事務所に統合されたという。大正 8 年度の『新潟県米穀検査成績報告』に本所は県庁内に置き、各郡市に支所を設置しその郡市内における生産及び移出検査事務を管轄せしめさらに移出米の多き枢の地に出張所を置きその管轄区域内の移出検査事務を管掌させるとある。

「佐渡市博物館研究ノート No.1」訂正

下記の箇所にご迷惑がありました。訂正させていただきます。

佐渡市博物館

訂正箇所	誤	正
p.5 各地名	畑野松ヶ崎 両津片野尾 両津羽二生 両津椎泊	<u>旧</u> 畑野 <u>町</u> 松ヶ崎 <u>旧</u> 両津 <u>市</u> 片野尾 <u>旧</u> 両津 <u>市</u> 羽二生 <u>旧</u> 両津 <u>市</u> 椎泊
p.18	表 1 行目 とっあん	とっ <u>つ</u> あん